

龍

古代鏡展示館秋季企画展

翔ける!

令和元年9月13日(金)～令和2年3月10日(火)

企画展解説シート 第6号



兵庫県立考古博物館 加西分館

古代鏡展示館

Hyogo Prefectural Museum of Ancient Bronze Mirrors

龍は、人間が作り出した架空の生き物です。その姿は、蛇のように長い体に四脚と角やひげをもち、自在に天空を翔けて、水に潜んでは雨をもたらすとされました。

さらに、時代とともに属性は変化します。自然の恩恵をもたらし、時に災いを起こす靈獣として畏怖されると同時に、東方の守護獣や皇帝の象徴になり、尊貴で聖なる神獣として畏敬されてきたのです。

今回の展示では、千石コレクションの銅鏡や祭礼の器に描かれた飛翔する龍の勇姿を追います。



とうてつもんゆう

⑫ 饗饗紋卣【商(殷)】高さ34.5cm、重さ6,200g

商(殷)代後期【約3,200年前】の壺形の盛酒用青銅器。提梁(釣り手)と鈕付きの蓋を伴う。祖先靈や高貴な賓客に供する酒を入れた。下膨れの器腹下半表裏に大きく饗饗紋*1をおく。上半部や圈足には夔龍紋*2や夔鳳紋*3が巡り、提梁の取り付け部には犧首を飾る。

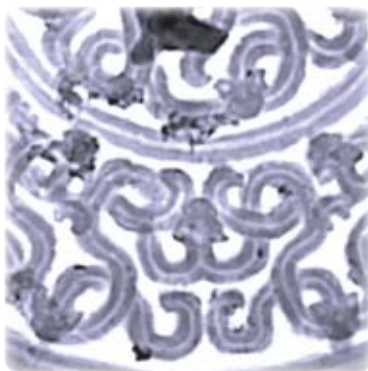
珍奇な器形と、その表面を覆い尽くす複雑で精緻な紋様が大きな特徴で、仕上がりは荘厳で重厚である。信仰/技術もしくは想像力/造形力の到達点を誇示する、至高の青銅祭器であることに間違いはない。



饗饗紋



夔龍紋・夔鳳紋



ばんちもん すかしほりきよう

⑬ 蟠螭紋*4透彫鏡【春秋戦国】15.0cm

絡みあう蛇身の龍

背面に嵌め込んだ透彫りの紋様板に、細長い胴の無数の螭龍を立体的に絡み合わせる。龍は内外の縁に噛みつき、頭部の眼や角は認められるが、胴に脚はない。体を二分するものもいる。柱状に伸びる獸形の鈕と外縁の八個の飾鋳も、龍なのかもしれない。



きんじゆうもんぎよう

⑭ 禽獸紋鏡【秦】22.7cm

龍章鳳姿

細線と小珠点とで構成される細地紋に、大きな糸巻形の四葉紋を配し、内側に二龍と二鳳を交互に並べる。龍は後ろをふり返りながら口を大きく開き、前脚を頭上にかざす。鳳も後ろをふり返り、非常に細長い尾を頭上に振り上げながら左右に展開させる。



ばんちもんきょう

15 蟠螭紋鏡【前漢】 22.8cm

龍うごめ 蠢く！

雲気をまとう渦状の龍三組が、細長い胴体を絡み合わせる姿を展開する。大きく口を開け、眼窩がんかが隆起した頭は明確であるが、中央に一条の沈線を走らせ、双線状に表現した体や脚は、うねりながら雲気や雲雷紋とも錯綜して、実に複雑な様相を示す。



ちりゅうもんきょう

16 螭龍紋鏡【前漢】 22.8cm

対峙する 双龍つぼみ

方格の四隅に、花の蕾つぼみの上に麦穂状の草葉紋を置き、それを挟むように双龍を四組配する。開いた口には前歯が並び、円弧を描く胴から尾のあたりで合流する。錫成分が多いため鏡面は白銀色に輝き、あたかもシャンデリアのような瀟洒な意匠に見える。



びょうきんほうかくきくしんきょう

17 描金方格規矩四神鏡【前漢】 16.4cm

東方を護る青龍きよしちん

四神と鋸齒紋や雲気紋を細線で描金している。龍は、外縁に脚を向け、左向きに位置し、流麗で繊細な雲気にまとわれる。両眼を見開き、二つの角を伸ばし、細身の胴は細線で満たされ、長い尾を巻き上げる。後ろ脚を大きく前後に開き、あたかも飛翔するように見える。



がそうきょう

18 画像鏡【後漢】 21.6cm

龍虎相搏そうはく

鈕を挟んで四等分した内区に、対峙する青龍と白虎、西王母と侍者、一角の神獣が並ぶ。龍は大きく左に振り返り、三角形に描かれた歯牙や眼、細かなひげや翼など丁寧に描かれている。図像はやや平板な描写であるが、大柄で躍動的であり、少しユーモラスでもある。



ばんりゅうきょう

19 盤龍鏡【後漢】 16.9cm

龍騰虎鬪

内区いっぱい、右に一角の龍、左に無角の虎が口を広げて対峙する浮彫りの姿を表す。頭と脚、長い尾を表現するが、瘤状隆起をもつ体の一部は鈕の下に隠れる。脚の間には亀と長い体の獣を従える。外縁には、長い尾をもつ龍虎、狐などが平彫りで描かれる。





ししんじゅうにしもんきょう
⑳ 四神十二支紋鏡【隋-唐】 24.8cm

四神青龍と「辰」

青龍は朱雀と向き合い、尻尾は玄武の区画に伸びる。角やたてがみはしなやかで、四肢の後方に繊細な翼がなびき、宝珠が伴う。肉彫りは厚く、筋肉の盛り上がりまで表現されている。十二支は方位を表す文字から、図像として動物が充てられるようになった。



ちょうぎんときんそうじゅうそうほうもんはちりょうきょう
㉑ 貼銀鍍金双獣双鳳紋八稜鏡【唐】 21.2cm

龍飛鳳舞

二龍と二鳳が唐草紋に絡まるように舞う姿を銀板に打ち出し、金メッキを施して、鏡背に貼り付ける。一角の龍は後ろを振り返り、双角の龍は前を向き、鳳凰と交互に配されている。それぞれの表情や体の細部を整で陰刻し、豊穡で繊細に仕上げる。



うんりゅうもんはつかきょう
㉒ 雲龍紋八花鏡【唐】 27.5cm

雲をおこす龍

玉に見立てた鈕のまわりに、一匹の龍が体を大きくうねらせている。細かい鱗で覆われた体に鋭い眼や長い舌、たてがみ、双角、三爪の四脚などを細部にわたって見事に表現する。躍動感に満ちた体は、龍本来の威厳を誇示しており、勇猛極まりない優品である。



けんたいじゅうもんきょう
㉓ 圈帯獣紋鏡【戦国】 19.4cm

龍の輪舞

鈕を中心に内から鈕座、内区、外区を太い圈帯で三つの同心円に区画し、そこに四、九、十四匹の龍を時計回りに巡らせる。頭は大きく左に振り返り、角や四肢の結節部はS字状に誇張されている。逆S字状に屈曲する体は、小珠点で充填されている。



さんちもんきょう
㉔ 三螭紋鏡【秦】 12.5cm

先鋭化する龍

龍は変形が著しい。中央の頭を右に向け、眼と口を大きく開いて歯牙を見せる。体はC字状に湾曲し、片脚で立ち上がる。両前脚を左右に広げ、花の萼のように分枝し、尾はバランスを保つように右に細長く伸びる。平彫りで影絵風に仕上げられている。



ほうかくきくばんちもんきょう
②⑥ 方格規矩蟠螭紋鏡【前漢】 18.4cm

意匠としての龍

内区の八つの区画内に、四匹の龍と、龍から派生した四つの雲気紋を交互に配する。龍は二条の突線で描かれ、体を半円に湾曲させて、後方を振り返る。眼窩上部と頬が突起し、結節部が盛り上がった三爪の四肢、先端が丸い尾などを明瞭に表現している。



とぎんほうかくきくしんきょう おうもう
②⑦ 鍍金方格規矩四神鏡【新(王莽)】 16.4cm

東方を護る青龍

東西南北を代表する星座を意味する四神が揃い、様々な靈獣・靈鳥や仙人が集う。細線で描かれた龍は右を向き、鋭い角と長い尾が特徴的である。相対する羽人は、參龍氏である。鈕座には十二支の「辰」、外縁の銘文には「左龍右帛(虎)辟不羊」が刻まれる。



ばんりゅうきょう
②⑧ 盤龍鏡【後漢】 13.4cm

龍と參龍氏(龍を飼養する羽人)

内区に右を向く浮彫りの単龍が描かれる。開いた口には長い舌と歯牙がのぞき、体は瘤状の鱗に覆われるが、大半は鈕の下に隠れる。龍の口の前には、靈芝を捧持した羽人が対峙する。龍を飼養して、夏の王「舜」に仕えたといわれる參龍氏であろう。



ずいじゅうりゅうほうもんきょう
③⑩ 瑞獸龍鳳紋鏡【唐】 20.4cm

龍騰鳳舞

小雲に片足を乗せた龍、麒麟、鸞、鳳の靈獣が鏡背を四分する。龍は後ろ脚を大きく跳ね上げ、前方に旋回するような勢いを見せる。体は盛り上がり、筋肉の隆起も表現されている。外縁の銘文には、「龍騰」(龍は高くはね上がる)と鑄出されている。

【用語解説】

*1 饗饗紋【とうつもん】

大きな二つの眼を強調した、左右対称の獣面紋。酒器などの主紋様として、目立つ位置に表されていることが多い。眼のほかに大きく曲がった角と、牙をむき出した口を強調しているものが多い。

*2 夔龍紋【きりゅうもん】

細長い胴体に一角と一脚を有する龍の紋様。水平の紋様帯のなかに横向きに表されることが多い。商(殷)代から用いられるが、龍の形態は次第に変化し、春秋時代からは蟠螭紋に変わっていった。

*3 夔鳳紋【きほうもん】

龍と鳳の合体した紋様で、鳥の特色を持ちながら、細長い胴体に表される。夔龍紋と同様に真横向きに表される。鳥は天と地を結びものとして、龍と同様に重視された。

*4 蟠螭紋【ばんちもん】

龍紋の一種で春秋時代に登場する。「螭」は角が未発達の子龍を指す。複数の螭龍が互いに複雑にからみ合って繁縟なパターンを描くもので、一見すると単なる幾何学紋のように見える。